



発行/ Luida 〒690-0158 和歌山県和歌山市二番丁9-777-212/2F TEL.073-488-7440 株式会社Oneedyestyle 専任 入藤子

DESIGN DESIGN LAB

Luida

| Wakayama Freepaper | VOL.2



面相師 堅田エル子のGOOD LIFE

シリーズ「持たざる者の代弁者たち」
しみずこうせい43歳フリーターのリアル

ルイダの巨大本棚



インターネットの普及により
世界中の情報やあらゆるものがたやすく手に入る時代になった。
そんな時代に私たちはどのようなグッドライフを求めるのか？
相対的ではない自分にとって、
本当に価値あるグッドライフの追求とは……

HELLO LUIDA

L is...
launch, league, learn, legal, legend, liability, liberal, license, life, live, local, logic,
longing, love, luxury,
...and luida.

GOOD LIFE

面相師

堅田エル子のGOOD LIFE



仕事にたずさわることは、わたしたちを悪から遠ざける。
くだらない妄想をいただくことを忘れさせる。

(ニーチェの詩集より)

海 南市日方の堅田エル子さん(80)は、羽子板やびょうぶの装飾に用いられる押し絵の作家・面相師として、約40年にわたり美人画や歌舞伎、古典の世界などを表現している。作品中の人物の顔の肌は白い陶器のようになめらかで、描かれた生き生きとした目や表情が、見る人を魅了してやまない。堅田さんはその貴重な押し絵と面相師の技術を後世に残したいと願い、様々な織りや柄の端切れのあふれた稽古部屋で、5人の弟子を熱心に指導している。顔の制作法は、まず手本の絵から写しとった形の厚紙の上に、綿をちぎって形良く積み、「絵絹」という薄く張りのある布を貼る。次にハマグリの殻を砕いた胡粉(ごふん)を乳鉢で3時間ほどすりつぶし、ニカワと水を加えた液体をその上に塗り、乾かす。そうして丹精込めて仕上げた顔に堅田さんは、体調や呼吸を整えてから目を描く。上まぶたの形に細筆でスーッと茶色の線を引いたら白目をぬりつぶし、目玉は茶色、その中心部は黒を塗る。さらに上まぶたの下にグレー、黒、青の線を重ね、最後に目玉の中心に白で、小さな「星」を入れる。

ひと筆描くごとに、その絵の具が乾くの待ってから次の工程を描くため1日がかかりだが、根気強く取り組み、生気あふれた目に仕上げる。会心の出来映えは、かつて鑑賞した女性が「作品の目が私を追いかけてくる」ともらした作品で、「誰かを見送っているような目を描きたい」。日本製の女性が絹の着物でうちわを持ち、夕涼みをしている夏の情景や、着物を幾重にも重ね、茶道のお点前をしている冬の情景など、押し絵の世界では季節感を尊ぶ。また、花魁(おいらん)の付人、かむろは打掛、半襟、帯に至るまで、梅の花の柄にしなければならぬという、装束の決まりごともあり、伝統美を継承している。堅田さんは作品に、思い出のある着物を使用することもある。幼少の頃に着ていた、菊やトンボの柄の赤い縮緬や、母によく似合った紺や茶色の小紋など、粋な柄の着物が作品中でよみがえることが楽しい。「何でも母が教えてくれました」と、白浜町の出身村1番の美人と評判で商店を営んでいた母、よねさんの思い出を話す堅田さん。体が弱く、外遊びよりも手芸に夢中の堅田さんのそばで、縫い物をしながら端切れの縫い合わせ

せ方やおかずの作り方などを教えてくれた。10代後半、親元を離れ住み込みの家政婦として働きに出る時には、「起こされる前に起き、言われる前に用をしない」押し絵の教室を開く際には、「お弟子さんを大事にして、お稽古は休んではいけません」。堅田さんはその教えを守り、85歳で亡くなった母の危篤の際にも稽古を優先させた。その日は、堅田さんの誕生日でもあった。病弱な体で押し絵の制作や指導一筋の日々を送る中、空き巣に入られたこともあり、災難や苦勞の多い人生だったが、毎日「私は世界で一番幸せ」と感じている。それは、雨の日の小学校から自宅までの帰り道、尊敬するもの知りの母の背中に負われて、一つの番傘に入った幼い頃の思い出によるもの。「あたたかった」。大事に育ててもらったと、感じる。忘れ得ることのない母の温もりを胸に、堅田さんは今日も布と遊んでいる。



和歌山県西牟婁郡白浜町出身。1975年(昭和50年)、押絵千曲流の住田雪華師匠の門下となる。昭和61、62年、ドイツでの日本文化紹介イベントに招かれ、2都市に羽子板を寄贈した。平成9年から海南市在住。県内各地で展示会や講習会を多数開催している。



シムズ 「持たざる者の代弁者たち」

しみずこうせい

43歳フリーターのリアル

現在、厚生労働省のデータによると雇用者数5391万人のうち非正規雇用者とされる人たちの数は、2023万人。

全体のおよそ37.5%にもなる。

パナリ前棟前、平成元年のデータでは非正規雇用者は全体の19.1%だった。

平成3年のパナリ前棟以降、失われた20年などと言われる景気の低迷や派遣法により、その数は増加の一途をたどっている。

平成28年のデータでは、非正規雇用者数2023万人のうち、35歳以上の非正規雇用者は1502万人、年齢を重ねると正規雇用にありつけない実態を物語っている。

30代、40代でフリーターは、今や社会的マイノリティとは言えない状況だ。

しみずこうせいさんも、そんな非正規雇用者の一人。10回も職を転々とし、現在43歳フリーター、コンビニと特殊清掃のアルバイトを掛け持ちしている。

趣味は、ほとんど勝つことのないバッチョと、一日の終わりに飲むワodka大酒。

フリーターと言っても決して楽な仕事ではない。コンビニのアルバイトは深夜勤務だし、特殊清掃は孤獨死の現場や事件事故現場の清掃。

死後、発見が遅れた現場などは腐臭が酷く肉体的にも精神的にもキツイ仕事だ。

結婚はしておらず独身で彼女もいないので節約しようと思えばできるが、収入は不安定で年取は200万円は

ど。低所得者と言われる層に入る。将来の不安など無いのだろうか、彼に話を聞いてみた。

「今の人生に、けっこう満足してますよ。オレって、世知に長けてるわけでも学があるわけでもないから、今出来る事を一所懸命やるだけなんだよね」としみずこうせいさん。以外なほど悲壮感などなく、ケロツとした明るさに肩透かしを食らう。

そんな、転職を繰り返したしみずこうせいさんだったが、現在の職場はどても気に入っているという。コンビニの職場も、特殊清掃の職場も。本人に曰く、自分の居場所があるのだと。

少子高齢化で、どの職種も深刻な人手不足のため、しみずこうせいさんのような人材が重宝されている現実がある。

時々、コンビニの職場仲間たちに特殊清掃の現場でのつらい体験を面白く話したりするという。「面白おかしく言っても、内容がハードなんでオアラートに包んでいただけね!」

失われた20年と言われ景気低迷の中、ベンチャー精神を持って逆境に立ち向かい起業する人たちも素晴らしいが、国や政府の経済政策の失敗の犠牲者とも言える彼らの直向きにもかく「たまにさ」にも敬意を払うべきではないか。

しみずこうせいさんの「底抜けに明るい笑顔を見て思った。」

最後に、「彼が言った言葉が印象に残っている。『オレってさ、つらい事があってもネガにちゃうからさ』



Luida

コワーキングスペース会員募集中
¥10000~
201 9 Junibanchō,
Wakayama-shi,
Wakayama-ken,
640-8158 Japan
☎073-488-7440



ルイダの入り口で、まず目に飛び込んでくるのは、巨大本棚。これはただの本棚ではありません。ひとつひとつのスペースがアートギャラリーになっており、あなたの作品を展示したり、販売したりすることができます。訪れた人の心に留まり、生活を彩る作品をお待ちしております。日常にアートを…それもルイダが目指していることのひとつです。

ルイダの巨大本棚

handmade mu*um.



ハンドメイドのアクセサリを主にネット販売、時々イベントにも参加しております。地元雑貨店COCOROKIDS様・ルイダ カフェ様に委託販売中♡
『はじめてのハンドメイドブック』に、グローブホルダー付きバックチャームを掲載して頂きました。



minne
<https://minne.com/@nyan0330aa/profile>

@Instagram
https://www.instagram.com/handmade_muum/



review
弱いから、好き。
長沢 節

ラジオで「出産、子育てが女性が働き続けることの阻害要因になっている」とアナウンサーが報じているのを読み、考えさせられた。女性の活躍が望まれながら、出生率の低下に悩む現代の矛盾を、どうしたらよいのだろう。その答えのヒントを、1980年代に、ファッション・イラストレーター-長沢節が、社会と個人の関わりを見つめて書いた、名エッセイの中に見つけた。
81年に発表された「大人の女が美しい」の中で、子どもは女性が生きていくために産むのだから、社会や男性が育てることで帳尻が合い、その方法は大人たちが知恵を出しあうべきだと、提言している。89年の「弱いから、好き。」の中では(たくさんの他人にカッコいいと思わせるように働くことが愛。子どもたちはきっとそんな大人に憧れてまねるだろう)と書いている。良い世の中を作るのは大人であるとした上で、「大人とは何か」をファッションや自身の恋愛感を通して繰り返し説いた。「大人の…」で女の理想像を求めた後、男の理想像を描いたという「弱い…」は、男女に関わらず、弱さを助け合って生きていくための、人間の一般のあり方を論じたエッセイで、温かさや説得力にあふれ、今もなお新しい。
長沢さんは1954年に創設した画塾「セツ・モードセミナー」で、「教えずただ一緒に描く」という自由な指導法を貫き、数多くの優れたデザイナー、スタイリストなどを輩出。世俗を排したりベラリストとして生き、1999年に82歳で急逝した。「弱い…」では、細い線が流れるように描かれた、セツ流のスタイル画のカットも楽しめる。



review
ようこそ地球さん
星 新一

日本のSF作家の第一人者である星新一の独自の分野、短くて不思議なショートショート42編が収められた一冊。中でもオスススは巻末に収録されている「殉教」という物語。
ある技術者タイプの男が、霊界にいる死者と通信することができる機械を発明し、ホールに人を集めた。5年前に死んだという、男の最愛の妻の「早くいらっしゃい」という明るい声や、その後自殺した男からの「死というのは素晴らしい。肉体から解放された気分だ」という語りかけが機械から聞こえ、聴衆は、死の恐怖を克服できる機械が発明されたのだと信じるようになる。そして、物語はなんとも言いがたい結末を迎えるのだが。
面白いのは、半信半疑だった聴衆が、死後の世界にいる愛する人との会話で、霊界の楽しさを確信して死んでいく様子の描写。突き詰めれば、人の判断基準なんていうのは、「好き」か「嫌い」か、だけなのかもしれない。
どんなに優れたテクノロジーや人工知能の、データを基にした寸分違わぬ判断を提示されても、最終決定は人の感情によることが多い、そのため間違いを繰り返す。
人類は、その間違いを是正しようとして進化を続け、その営みの中で文明が生まれたのではない。ショートショート全編にわたり、テクノロジーや人工知能にはできない芸当に興じる人類の、可笑しさや愛おしさが鋭い視点で描かれている。